●事例紹介●

国際基督教大学「サービス・ラーニング」の取組

山本　和
（国際基督教大学サービス・ラーニング・センター長）

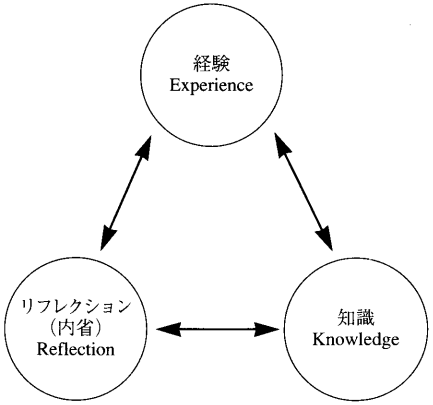
一「サービス・ラーニング」とは何か

国際基督教大学（ＩＣＵ）では、学部教育プログラムの一環として、「サービス・ラーニング」に注目し強化しようと取り組んでいる。「サービス・ラーニング」は、学生たちの自発的な意志に基づいて、一定期間、社会奉仕活動（サービス活動）を体験することによって、それまで学校などで知識として学んできたことを実際のサービス体験に応用し、また実際の体験から生きた知識を学ぶ新しい教育プログラムである。学生は国内外のサービス活動を行う団体で相当の期間奉仕活動を行い、その経験から学んだことをまとめて発表し、報告書を作成することによって単位を認定される。

その場合、実際のサービス活動を有意義に行い、そこから多くを学ぶために、事前の準備や心構えが必要であると同時に、実際の体験を通じて学んだことを自分の知識に取り込んで行く内省（リフレクション）の過程が組み込まれていることが教育プログラムとして大切なポイントである。いわゆる学生ボランティア活動と共通する要素は数多くあるが、「学んだことを体験に生かし、同時に体験から学び取るプロセスが積極的に取込まれている」ことが明確なプログラムである（図1）。ＩＣＵでは「一定の期間」を実動三〇日（フルタイム換算）相当とする規準を設定し

事前の準備、体験中や事後のリフレクションを有効に行うために、アドバイザーとなる教員をその都度定めるほか、サービス活動を行うにあたっての準備のコースや事後のリフレクションのコースも設けている。また、一般教育科目の中に「サービス・ラーニング入門」という科目を設け、全学の学生がサービス・ラーニングに関心を持てるようにしているほか、「国際非営利部門の運営原理」や「国際NGO論」などの関連するコースを開講している。また、二〇〇二年には「サービス・ラーニング・センター」を設置して、それに取り組む教員や学生のサポート、受入機関との関係維持、内外のネットワークづくりに携わる体制を整えた。

図1　サービス・ラーニングの概念



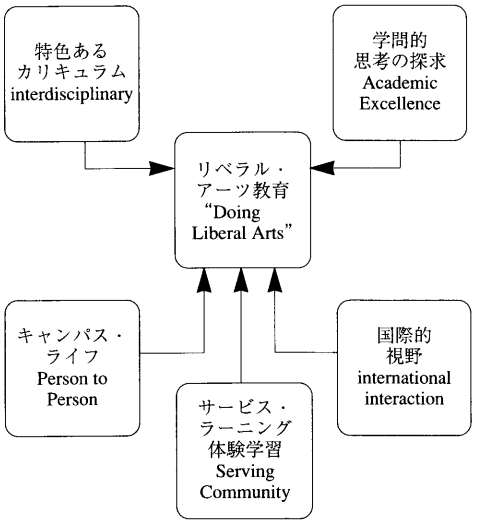
©Florence McCarthy,ICU

二　ＩＣＵの取組の特徴

「リベラル・アーツ、キリスト教精神、国際主義を強調して、神と人とに奉仕する人材を育成する」というのがＩＣＵ建学以来の教育理念である。国際的には、世界平和の実現を目指す真の国際協力ができる人材を育成したいと願う教育と言っていい。こうした建学の理念を反映して、単位こそ与えなかったが実際の奉仕体験を重視してそこから学ぶということは、創立以来いろいろな形で実施されてきた。例えば宗務部が毎年春休みに実施してきた「タイ・ワークキャンプ」は、タイの山岳地帯の村でパヤップ大学の学生と一緒に奉仕活動を行うものであるが、二三年の歴史を持ち参加者に多大な影響を与えてきたし、ＩＣＵの在る三鷹市と学生、教員が参加して行う地域開発のプログラムも歴史を刻んできた。

図2に示したとおり、ＩＣＵが目指すグローバル化時代の全人的教育は、特徴ある学際的なカリキュラム、専門領域の基礎を追究する学問的態度、国際的な交流と理解の推進、少人数制の下での人間関係を大切にするキャンパスライフに加えて、現実の社会の問題を直接体験して学ぶ「サービス・ラーニング」の相互作用によって、より強固なものになると期待している。その際キリスト教の精神は、これら全ての関係のバックボーンに生きていることを期待する。ＩＣＵが強調する「行動するリベラルアーツ」とは、現実の世界の問題に積極的に関わり、国際的な視野を持って人や社会のために奉仕できる人材の育成を目指す教育であり、その柱の一つがサービス・ラーニングであると私たちは受け止めている。

図2　ＩＣＵが目指すグローバル化時代の全人的教育



サービス・ラーニングを実施する具体的なやり方には多様なアプローチがある。ＩＣＵの場合には、大学全体が比較的少人数で、一つの教養学部としてまとまりを持っていること、さらに三学期制をとっていて短期集中型の授業スケジュールとなっていることなどから、サービス・ラーニングは全学の学生を対象として、学生個々の関心を重視してプログラムを組む、いわばテーラーメード型のプログラムが中心となっている。学生の関心と意志を尊重しながら、各々にアドバイザーを定め、またセンターが奉仕活動先の情報を提供したり仲介を行ったりして、個別性の高いプログラムを組み立てることを主眼としている。ニーズにあった質の高いプログラムを組むことが学生へのインパクトという意味でも、受入先との持続的関係の維持という意味でも重要であると考えるからである。

三　派遣先の開発

サービス・ラーニングによる学生たちの派遣のルートに

は、国内で主としてサービスを行う機関への派遣、国際的な場面でサービスを行う機関への派遣、海外の大学を通じての派遣の三つに大別される。最初の国内の機関に派遣するものを「コミュニティ・サービス・ラーニング」というコースとし、後の二つを「国際インターンシップ」というコース名で国際サービス・ラーニングと位置づけている。

第一のコミュニティ・サービス・ラーニングについては、三鷹市が数年来継続して夏休みに本学の学生を数名ずづ受け入れて多大の成果を挙げているほか、三鷹国際交流協会、東京国際ラーニング・コミュニティ、興望館、アジア学院、賛育会病院などが定期的に協力してくれている。

第二の国際的なサービス機関は、国際的な場面で奉仕活動を行っている非営利法人、国連機関、国際機関、在外公館、研究機関などである。海外に派遣される場合も多いので、アドバイザーとセンターの指導のもとに、受入機関、ＩＣＵ、そして学生とその保護者が、予め活動計画・内容を合意したうえで実施している。この種のプログラムはもっとも歴史が古く受入先は極めて多様であり、数十か所への学生派遣の実績がある。

第三の派遣ルートは、ＩＣＵが海外の大学とパートナーシップを組んで、大学の関与のもとに国際サービス・ラーニングの学生交流を行う全く新しい試験的なプログラムである。この制度のもとで二〇〇三年夏以降、南インド（レディ・ドーク大学、アメリカン大学）、北部タイ（パヤップ大学）、香港・中国（香港中文大学）、台湾（東呉大学）、インドネシア（ペトラキリスト教大学）フィリピン（シリマン大学）、アフリカのマラウイ（ワシントン州立大学）に一八名の学生を派遣した。また二〇〇四年の春学期には、パートナーシップに基づく交換学生として、タイとインドから計四名の女子学生をＩＣＵに六週間程度招いて交流の成果を挙げた。

この制度においては、学生たちは派遣先大学において指導を受けたり授業を聴講したりしながら、その大学周辺の社会奉仕機関に行って奉仕活動を体験する。このプログラムでは異文化環境で社会奉仕体験をするわけであるから、派遣される学生はもとより、受入側の大学の学生、教職員、サービス機関にとっても学ぶことが多いのではないかと期待される。この試行的なプログラムをよりよいものとするため、今年三月アジアの七大学の実務者が東京に集まって話し合った結果、いろいろな可能性が開けつつある。来年にはその評価と今後の方向性につき実務者会議を行うことが予定されている。

四　グローバル化時代の人材育成

グローバル化がますます勢いを増している状況の中で、真に国際社会で貢献できる人材を育成することが大学教育に求められている。サービス・ラーニングはそのような人材育成のニーズに答える有効な教育手法であると言えるだろう。それは次のような理由による。

現在進行中の「グローバリゼーション」は、人、モノ、カネ、情報、価値観、考え方が短時間のうちに世界中に波及する現象であり、それはあらゆる取引の自由化・規制緩和の潮流、ＩＴを中心とする技術革新、東西冷戦構造の終結などを背景に特に一九九〇年代以降顕著になった現象であり、「市場経済価値」と「人間価値」のグローバル化が同時に進みつつある。このようにグローバル化が急速に進み、そのよい面も悪い面も短時間のうちに世界中に及ぶような環境のもとでは、改めてどのようにしてグローバル化のなかで生きていくか、世界に通用する信頼を築いていくかが大きな課題となる。グローバル化の中で信頼を築くことのできる能力の基本は、どの人間社会でも通用する、「信頼できるか」「約束を守るか」「相手の立場を理解できるか」などごくベーシックな人間形成である。サービス・ラーニングのプロセスを通じて学生たちは、「体験から現実を学ぶ」「現実の問題を解決する必要性を認識する」「自分が社会のために何ができるかを考える」「人生の意味を考え社会に対する責任感をもつ」「思いやり、リーダーとしての自覚を持つ」などを身につける。教室で与えられる知識では得られない、学際的、総合的な知識と社会に対する責任、人に奉仕することの意味を学び、総合的な見方や判断力をつけることに極めて有効であると思われる。

サービス・ラーニング・プログラムの構築に携わってみて、特に大切だと感じることは、この種のプログラムを育てることに対する大学当局の組織的なコミットメントが欠かせないということである。そのうえで、学生の指導にあたる教員の協力と学生の積極的な参加がないと持続的な発展は望めない。また、受入機関についても、学生たちの熱意とエネルギーを評価して協力してくれる体制が必要である。かなり時間と手間がかかるが、学生たちの潜在力を引き出し、真の世界に通用する人材を育てるためには、手作りによる「心の教育」への取組が必要であると思われる。内外のネットワークを築きながら体験から学ぶアプローチへの理解が進むことを期待したい。